

中村草田男論 俳句に見られる Christianity

中 島 賢 介

はじめに

人間探求派の俳人中村草田男（1901～1983）は、死の前日に受洗をしてクリスチャンになった。彼の Christianity については、三女の弓子氏のエッセイ『わが父草田男』や宮脇白夜氏の著作『中村草田男論－詩作と求道－』などを読むと、彼が前日まで信仰告白を引き伸ばした理由が理解できる。今回は、毎年のように詠まれる一目で宗教的なニュアンスが理解できるようなものを含め、作品内部から湧出する Christianity に迫るための準備をするべく関連句を可能な限り集めてみた。句の選択においては、明らかに解説などで宗教性を核としているものや、宗教行事や会堂神父など関連する事物が詠まれているものを中心に、年代順になるよう配慮した。

1 戦前

1936年（昭和11年）以前

聖母像高し暖炉の火を裾に

1936年（昭和11年）36歳

福田直子と結婚。日野草城との「ミヤコ・ホテル論争」

第一句集『長子』刊。

白梅や天日白き十字なす

妻禱る真黄色なる夕焼けに

八月も落葉松淡し小会堂

百合の香は神の七つの窓を出ず

神の窓夏山低く亘り亘る

聖燭はすゞし一聯左右に二點

夏瘦せの妻や外国人と禱る

夏真昼禱れる眼窩暗うして

神の樂梁をたゆたふ爽かに

1937年（昭和12年）37歳

なし

1938年（昭和13年）38歳

洗礼涼し母が腕を欄として佇つ

中 島 賢 介

1939年（昭和14年）39歳から1940年（昭和15年）40歳

第二句集『火の鳥』刊。

なし

1941年（昭和16年）41歳

第三句集『萬緑』刊。

花に露十字架に露煌と掛かり

1942年（昭和17年）42歳

やゝ寒の壁に無髯の耶蘇の像

1943年（昭和18年）43歳

十二月夫婦羊に鳩下りて

冬空に聖痕もなし唯蒼し

1944年（昭和19年）44歳

勇氣こそ地の塩なれや梅真白

1945年（昭和20年）45歳

なし

2 戦後

1946年（昭和21年）46歳

空は太初の青さ妻より林檎うく

共に雑炊食すキリストの生れよかし

一と本の青麦若し死なずんばてふ語なし

十字架の樹つや腕木は蝶の宿

白百合や天使は聖母より潔し

白百合の明暗天使の眉かすか

1947年（昭和22年）47歳

第四句集『来し方行方』刊。

仰向き歩みつ髪結ふ乙女復活祭

岩すゝしピアノの上の黒き聖書

比喻もろとも信仰消えて枯野の日

受洗の子朝顔厩咲き封じ

汐浴びし人の讃美歌海廣ら

1948年（昭和23年）48歳

隣人の戸の音戸越しに降誕祭

蔓のからみし迹ふかき杖降誕祭

降誕祭睫毛は母の胸こする

才能では消せぬもの罪梅大輪

清水流る懺悔の後の黽勉に

1949年（昭和24年）49歳

ことのはは終りぬ聖樹灯りけり

前途永き妻に加護あれ降誕祭

戦後の聖夜ゲルマン白き禿盧頂

聖夜の四壁想望ふは火の雨黙示録

春晝や教會造営の機械の音

母姉の禱りの前を手毬の子

1950年（昭和25年）50歳

教會發して春水の中岩多く

ボートにて湖来し大工チャペル建つる

墓の子もアダムも土塊一塊より

聖母子像動く時計のありて涼し

麵麴とトマト、バッハの曲からペトロの聲

1951年（昭和26年）51歳

虹より上に「高みを仰ぐ神」あるなり

1952年（昭和27年）52歳

林檎まぼりつ戦備を談ずカインに似る

信仰の塔は三角に三日の月

梅雨ごもれる神、罪深ふかき母子ゆるし給へ

枯櫻神父の灯の窓縦長し

1953年（昭和28年）53歳

第五句集『銀河依然』刊。

鐵に凍つチャペル扉の白樂書

垣内の麥畑道や吾子を捧ぐ

祈りの身もだえ金木犀に頭突入れ

行く年やヨルダン受洗主あやに若し

1954年（昭和29年）54歳

大人等を見捨てし一童復活祭

厭人の果ての禱りも咳混り

梅雨芽の月「主」を吾に似たる人と覺ゆ

三尺寝樂韻さながらゲッセマネ

1955年（昭和30年）55歳

光ある中妻子と歩め薄氷期

中 島 賢 介

氷水甘し罪人の分際に
昼寝の後の不可思議の刻神父を訪ふ
祖国二分の神父と語る白雨の中
父はみな「工人ヨゼフ」期帰雁ひそか
聖院青芝椋鳥降りて向き向きぞ
聖母伏目炎天子を抱き玉に乗り
高さ忘れぬ円柱の裾白雨打つ
白雨かをる聖院乙女に白しぶき
金床・金槌技術者讃の手ぶりすゞし

1956年（昭和31年）56歳

第六句集『母郷行』刊。

語らぬ神と語らずなりし人間さむし
低き雷主の血は血として若かりし
町のキリスト蝙蝠刻に現るるのみに
或る屋根の下に琴の音聖母祭
十字架白塗り夏瘦の極と肥満の極

1957年（昭和32年）57歳

螢火夜々修道院を乱れ超ゆと
墓地中にも花奈畑や母を禱る
虹の後新月出でけん「洪水以後」
修道女中道忌むと汗し笑ふ
修道院夜は魔物とて合歓とざす

1958年（昭和33年）58歳

聖夜劇の出を待つヨゼフ髪灰色
聖夜劇の幼基督しやつくりこ
聖夜劇のマドンナ人を見まじとす
祈りの前の距離が消えゆき夏薄暮
はるかか白衣を基督と識りルオーの秋
白鳥や度ましきもの雨後の水
鐘楼したたりチャペル濡れそむ五月雨
岩窟聖母滴り伝ひおち易く
看護婦とまがふ理髪婦降誕祭
石膏型を今出し基督春日吸ふ
犬ふぐり祈らぬよりは禱りしげし
松は渝らず木々若葉して罪古し

神なき糊塗の善人蔑視も梅雨に入るか
溝浚へ罪人ぞたかが俳人ぞ
碧眼ならぬ神の眼妻の眼のすずし
罪ある者に甘草咲けり百合に似て
聖母子像愛慾受胎の空も澄めよ

1959年（昭和34年）59歳

教会の庭豪放の焚火せよ
復活祭灰から黄花吹かれ出で
黄花なべていのちながしと復活祭
南中の正午の冬日アヴェ・マリア
文字の懺悔は血を吐き切らずほととぎす
妻子等の神の白衣へ熱き雨
汝が有縁者の有縁に生きよ薔薇に祈る
薔薇に祈る僧が簪買ふが如
「洗足水」のごとき片陰在り得たり

1960年（昭和35年）60歳

食後の真水聖夜の吾子等祈り初む
ゲッセマネからあらはの春灯のありにけむ
クリスマス碧羅の色もて陽を飾る
聖樹陰モナ・リザ歳の諸相帯ぶ
身は幸運児謝しつ祈れと聖夜妻
柳の空罪人罪なき妻を待み
白鳥やソドム・ゴモラは一と度燃え
遠鳴る秋晴カインの裔もアダムの裔

1961年（昭和36年）61歳

基督は癒えし者の眼蔭散り尽き
春灯点滅部屋々々過ぐる聖職者
冬涛や懺悔の果の白勢ひ
遠くて近き神や牧場の復活祭
父の創りし裸像もありてクリスマス
死にたい妻も生きたい母もクリスマス
萌えるロータリー神父のカラー水平に
白髪ヨゼフは聖母子の辺に春しづか
アーケード縦窓神の場遠涼風
不浄場も礼拝堂もいま日盛

中 島 賢 介

神の丘が膝折り膝の間泉湧く
神から還りし供物の食味山の蟻
折返し「蛇の世界」へ迂り去りぬ

1962年（昭和37年）62歳

「神を畏れよ」返り花さへ死の灰忌む
禱の前を飛燕の迅きこと一度
ラザロの感謝落花の下に昼熟睡み
谷の秋彼方の懸路ゆくは妻
果物と人工の菓子聖夜沢に
聖樹避けざま棕櫚に触れたる音さやか
枯野の神父等歩と語とともに相合ふか
神父の眼窩盲の如し深き夏
朝泉信篤きもの水面渉る
吾を襲ふ馬蠅谷に修道女

1963年（昭和38年）63歳

無色とは純白冬の神父館
隙間風そして洩れ灯を天使覗く
脚下は古称の「灯の海」だらけクリスマス
クリスマス夜半の牛馬の尿度まし
クリスマス妻生みし父母の霊に謝す
孫の聖夜紙雛めきて紙天使
東風の山路振りかへり聴く神の話
最も低し聖夜末子の切る十字
真昼を更に醒ます鐘声復活祭
砂利踏み土踏み草に副へゆく復活祭
柄のまま杖が咲かば白百合イースター
笛の雫振り切る孫もイースター
蘭の花や拇指越す次指の天使の足

1964年（昭和39年）64歳

縦のまつかさ巨きや聖日めきて歪む
親より低き子の十字架碑つくづくし
十字架碑の丘より雲雀絶間なく
神の右も左も無しや揚雲雀
ただ種蒔く己を語らぬ人にして
主よりへだてて晩秋の地に己がサイン

水までは染めで聖地の薄夕焼
真の「智」は「和」なりと信ず蛇遊ぶ
葱坊主これも戦後の教会堂
敗戦忌舌なき鐘の吊られしまま
触れてみて信ずる輩夏陽炎
夏瘦せて三十歳みな聖鬚髯
泉辺に足洗ひあひ修道尼
夏芝や「掬ひ走り」に修道尼
藤椅子の神父やわれ等平畳に
夏の昼餉の燭火や共に今日を謝す
白桃や神父桃色やや褪せて
同齡神父短夜不眠の主と識るも
神父と鱒釣「結晶化」語りつつ
神父の竿に虹鱒躍り吾妻笑みぬ
神父の円頭落葉松卒然夏月代
虹鱒提げて神父の孤影月に離る
人種超えての「望郷」とは何夏の月
聖堂の霧の端窓母呼ぶ声
初日に対し鳩の心と蛇の知恵

1965年（昭和40年）65歳

こころ貧しき空の色あり冬日澄む
ひそやかや聖夜夜明の小盗人
棕櫚に北風乃木神社裏修道院
爪先走り北風に日本修道女
冬灯の窓に黒三角形修道女
「素燈」ともいふべき冬灯修道女
鳥等寝ぬ冬灯も宵の修道書
冬灯拾しえらばるる者召さるる者
ルルドの聖母喇叭水仙甕に似て
栄光を希ひ鍍金す冬の岩へ
聖母と寒岩点々条々小鳥の糞
一語にも対き合ひ余寒修道女
礫々踏んで復活祭の卵運ぶ
アダムによりて死したるわれ等復活祭
浅間の巨虹われや七重の袴なす

中 島 賢 介

赦されの証の虹の今か爆ずる
両手両足揃へ佇つ児に聖夜来る

1966年（昭和41年）66歳

悴みて「神のみぞ知る」と啣てる人
十字架墓あたり耕しねんごろに
春の聖堂鎧のさまに翅のさまに
神の春風垂枝はすべて岩壁打つ
聖歌吹き散り春草吹き立つ葉裏白し
春嵐神父は黒き肩を張りて
春昼聖歌泣くことのみを業ぜし吾に
春愁ならむや出埃及記誰が上ぞ
泉へ落ちで罪人墮涙顎伝ふ
橄欖千歳一葉一痕深みどり
聖画も合唱春の餅の天井画
マリア祭嬰兒てのひらまで円し
母と妻に友もまみれよマリア祭
芸は永久に罪深きもの蟻地獄
新人の神父の説教父の日や

1967年（昭和42年）67歳

命を謝す聖夜に沈黙せる神へ
指股ぬくき冷えし指組み祈りたる
ソドム・ゴモラの日本も茅舎忌もかなし

1968年（昭和43年）68歳

聖母の岩窟笹鳴姿現はして
主は復活聖母は老いず笹鳴ける
白薔薇聞き聖母の窟のしめり聞く
聖堂の一稜夏の虎落笛
“ I will reply ” この碑の真上夏日のみ
蝸牛角出し人会堂へ没したり

1969年（昭和44年）69歳

楽園の林檎の木に触れ咲きしものよ薔薇よ
春の兆妻の祈祷の朝の燭
春一番然るべき映画神父と観に
手足拭き天日篤し復活祭
母子草遅々と建ちゆく修道院

わが罪は我が前背より日雷
波打つ聖歌夏毎に古る身なれども
十字架のかたち木槌のかたちすずし

1970年（昭和45年）70歳

梅真白生者を祈り故人に謝す

1971年（昭和46年）71歳

修道尼三人邂逅冬ひそか
眼頭押へて女講師降壇聖五月
復活祭友の遺児うたて万能児

1972年（昭和47年）72歳

ぬくき岩神父と巨犬手首乗せ
中世デューラー馬鈴薯の葉を神飾
唾蟬の夕の座遠妻の祈る姿
冬の祈身の体臭の場を去りて
冬の祈人黙し魚口うごく

1973年（昭和48年）73歳

初弥撒や碧眼神父疾に堪へて
初弥撒や碧眼神父和語朗々
踵の迹もとどめずシスター冬の土
うからの声雨のち晴の復活祭
復活祭又眠らむと泣く赤児
山鳩の二羽の歌垣復活祭

1974年（昭和49年）74歳

悔い改めし者へ空から白梅賜ぶ
十字架に虚飾紅蔦まつはれり
蜂蜜甘く蝗ぞ苦きただ二た味
泉辺までへ「我等が足を洗へ」の声

1975年（昭和50年）75歳

睦月豊満「幼童基督」乳首含む
初日へ睫濡れて縋れて安堵して
万愚節「無」をば「God」と宣りし僧
修女たらむの直前なりしか洗ひ髪
本来古色のカリエールの「母子」像春逝きつつ

1976年（昭和51年）76歳

なし

中 島 賢 介

1977年（昭和52年）77歳

人恋しくば隣人を訪へ遅桜
深秋の「主」は白姿遠姿

1978年（昭和53年）78歳

妻に倣ひて「天なる父」の名呼びて朱夏
をみなの魂たかく召されつ聖母の月
めぐりあひやその虹七色七代まで
供華の花冠皚々悼みの神通ふ

1979年（昭和54年）79歳

光にそむく壁には昼の灯クリスマス
面紗素く塔頂も然なりクリスマス
償へよと寒鴉謝せよと山鳩鳴く
呼び合ふ蒲公英うなづき合へる聖母像
真先かけて聖母に祈る晩涼ぞ

1980年（昭和55年）80歳

第八句集『時機』刊。

なし

1981年（昭和56年）81歳

飛雪が打つ帽二たとほり同宗へ白他宗へ緋
中指は人指さで雪中人へ迫る
慕ひ寄る人の波やとどまるなき雪の波や
涯なき降雪宣り言葉絶えず世へ満ちゆく
「万軍のエホバ」の名と「キリスト」の名降り降る雪
降る雪刻々「自律の人ならざれば期待せず」と
我が家の祭壇に故人なる一宗徒雪洽し

1982年（昭和57年）82歳

なし

1983年（昭和58年）83歳

8月5日急性肺炎のため逝去。

修道女の単影薄暮の砂穿つ

おわりに

桜楓社から発行されている『中村草田男』の巻末にある年譜と照合すると、時代性の推移とともに作風が変化していることや同じ語が繰り返し用いられていることが分かる。列挙してみると、彼のキリスト教との微妙な距離感を確認することも可能である。

中村弓子氏は、エッセイ集『わが父草田男』の中で彼の宗教観について、次のように述懐している。

父にとって信仰へ向かうための障害となっていたのは何だったか、それをはっきりとらえることは、とうてい私にできることはありません。ただ、父が根本的に『我を忘れる』ことができない人であったということは、やはり大きな障害であったと言えるだろうと思います。『我を忘れる』ということは、非常に人間的な愛から神的な愛（神への愛、兄弟を通しての神への愛、神からの愛）までを貫く根本的特質であると思いますが、父にとっては、ものを創る人間としての途方もなく大きな自我ゆえに、そしてまたもう一方では、これまた途方もなくもろい神経ゆえに、『我を忘れる』ことは極端にむづかしいことでした。信仰を持つ人間にとっても『我を忘れる』ことの困難はつねに大きなつまずきの石ですが、それは父にとっては生涯の業でした。

今回は、このデータをもとに、時系列の考察のみならず、家族や神父との関わり、「禱り、禱る」「『聖』の響き」「謝す」などといった言葉など様々な角度から、彼の Christianity に深く切り込んでいきたいと考えている。

参考文献

- 『中村草田男全集』みすず書房 1984年（昭和59年）
香西照雄『中村草田男 新訂俳句シリーズ・人と作品14』桜楓社 1985年（昭和60年）
中村弓子『わが父草田男』みすず書房 1996年（平成8年）
宮脇白夜『中村草田男論－詩作と求道－』みすず書房 1987年（昭和62年）
「萬緑」編集委員選『中村草田男集 現代俳句の世界 6』朝日新聞社 1984年（昭和59年）